

京都大学	博士（法 学）	氏名	森 川 輝 一
論文題目	〈始まり〉のアーレントー「出生」の思想の誕生		
（論文内容の要旨） 本論文の主題は、ハンナ・アーレント（Hannah Arendt: 1906-1975）の政治思想を、アーレントの思想形成過程に即して解明することである。アーレント研究は欧米のみならず日本においても盛んであり多くの文献が存在するが、アーレントにおける古代ギリシア的政治概念の重要性にもっぱら光を当ててきた観のある先行研究では、以下の諸点が十分に（あるいは全く）解明されてこなかった。すなわち、①アーレントの思想形成におけるアウグスティヌス解釈の決定的重要性、②アーレントの全体主義理解の変化、およびそれが彼女の古代ギリシア思想および近代政治思想の理解に与えた影響、③主著『人間の条件』における実践的行為概念（活動action）を「出生natality」の原理と結びつけるアーレントの哲学的洞察、である。本論文は、先行研究において重視されてこなかった『アウグスティヌスにおける愛の概念』や『思索日記』をはじめとする未公刊の草稿をも含め、アーレントのテクストを精読することを通じて、以上①～③の論点について、体系的かつ整合的な解明を試みるものである。アーレントは、全体主義という二十世紀の政治的暴虐に応答すべく、古典古代以来の政治思想史の伝統を古代ギリシア哲学と初期キリスト教というその二つの起源に遡って問い直し、そのことによって現代政治哲学に大きな影響を与えた思想家である。すなわち、その思想の解明は、西洋政治思想史の系譜の批判的再検討を通じて現代の政治を根底から問い直す端緒となるであろう。 第一章の主題は、先行研究の批判的再検討であり、アーレント研究が二十世紀後半の政治理論の諸潮流の対立を映し出す鏡の如きものであることを明らかにする。第一節では、1970年代後半から80年代半ばにかけて、M・ジェイとR・ベイナーという二人の政治理論家が、それぞれ「実存主義的決断／ハーバーマスの熟議」、「アリストテレス的な解釈共同体／カント的な自由主義」という互いに相容れない二側面をアーレントの思想に見出し、その後のアーレント研究の動向に大きな影響を与えたことを指摘する。第二節では、こうした、いわば「矛盾を孕んだ思想家」というアーレント像が、1990年代以降の政治理論における「モダン／ポストモダン」という対立の中で、さらに拡散してゆく過程を追跡する。その大まかな構図は、アーレントのギリシア・ポリス愛好を危険な反近代主義として批判しつつ、彼女のパーリア論やカント判断力論を近代的な公共圏の再編に資する思想として評価する熟議デモクラシー論と、アーレントのポリス論を、差異を肯定するポストモダンのアゴーンの構想として評価し、近代的な公共圏の閉鎖性や同一性を解体する試みに接合しようとする闘技デモクラシー論との対立であるが、そこに共通して見出される解釈手法を批判することが、第三節の主題である。すなわち、どの解釈者も、アーレントの思			

想の中に対立する契機を発見して区別し、その一方を自らの理論的な立場に引き寄せて評価し、そこから他方を批判するという手法において共通していること、また「アーレント政治思想の中心＝ギリシア・ポリス」という根拠のない先入見を共有していることが、明らかにされる。

アーレントがアウグスティヌスを高く評価していることは周知の事実であるにもかかわらず、先行研究において黙殺されてきたアーレントの最初期の著作『アウグスティヌスにおける愛の概念』（1929年）の内容と射程を検討することが、第二章の主題である。まず第一節において、若きアーレントの試みが、アウグスティヌスの「愛」の概念の内に自己と自己ならざる他者との動態的な関係を捉え、アウグスティヌスの思想形成に古代ギリシア哲学とキリスト教という二つの異質な思想系譜の交錯を見出そうとするものであったことを、確認する。第二節では、アーレントがアウグスティヌスの愛の概念を、ギリシア的な「欲求としての愛」とキリスト教的な「非欲求的な愛」という二つの要素を孕むものとして読み解き、かつ、そこからアウグスティヌスの「世界」概念の二重性を析出したことを明らかにする。すなわち、不滅の宇宙（天地）というギリシア的な世界と、可滅的な人間社会というキリスト教的な世界という二つの側面である。これは後年の『人間の条件』等における「世界」概念の原型であるが、29年のアウグスティヌス論においては、キリスト教的な側面とりわけパウロ的な終末論が過度に強調され、十分に展開されぬままに終わったのである。第三節では、これまでの通説——ナチス政権成立とともに亡命し、シオニスト運動や反ナチス活動にコミットするようになったアーレントはアウグスティヌス論におけるような哲学的思弁を放棄した——とは異なり、アーレントが亡命時代のパーリア論やパレスティナ問題への評論において、アウグスティヌス論での洞察を反復していることを明らかにする。すなわち、パーリア的人間は所与の人間社会からの疎外・排除を自覚的に引き受けることで、社会の不正を告発し、新しい政治社会を建設するための自由を得るのである。しかし、44年のカフカ論の検討から明らかにされるように、この時期のアーレントは新たな政治社会の創設を、複数の人々による継続的な協働行為ではなく、メシア的な一者による創造（制作）と看做していたに過ぎなかったのである。

第三章と第四章では、アーレントが亡命先のアメリカで政治思想家として歩むきっかけとなった大著『全体主義の起源』が、その執筆過程における思考の展開と転回を焦点として、検討される。同書の初版（51年）と第二版の結語となる「イデオロギーとテロル」（53年）の間で、『人間の条件』における「活動」「出生」概念が誕生するからである。第三章では、まず第一節で、二十世紀全体主義の本質を人間性の破壊という反-（或いは没-）道徳性に見出し、その担い手として「暴徒（モップ）」と「大衆」という二つの人間類型に着目するアーレントの全体主義論の特質を指摘した上で、第二節において、『起源』初版までの彼女の全体主義論の展開を跡付ける。この時期のアーレントによれば、全体主義の担い手は「モップ」、すなわち近代資本主義社会が生んだ利己的な近代的個人の極限形態であり、経済的利益のために政治的暴力が極大化さ

れた帝国主義の時代において、暴力を自己目的化したモップが、やがて破壊のための破壊を追求する全体主義を創出したのである。このように、能動的で主体的な暴力行使に全体主義の駆動力を見出すという『起源』初版の——第二版では放棄される——全体主義観は、この時期のアーレントの思想（史）的パースペクティブの限界と深くかかわる。すなわち、第三節で明らかにされるように、『起源』初版の頃のアーレントは、全体主義の問題を西欧近代の枠内のみから問い、人間の行為をもっぱら制作（一者による破壊と創造）のモデルで理解していたのである。それを明瞭に示すのが、ハイデガー哲学を「実存」哲学と呼び、近代のニヒリズムの到達点と位置付ける46年の論文にほかならない。

第四章では、1953年の論文「イデオロギーとテロル」および『全体主義の起源』第二版（58年）において、アーレントの全体主義論が大きく変化しており、その変化が彼女の政治思想の形成において決定的な意味を持つことを明らかにする。まず第一節において、『起源』初版公刊直後にアーレントが、ハイデガー哲学を実存主義ではなく人間存在の時間性を問う思想として捉え直し、さらにハイデガーの影響を受けつつマルクスの労働概念に批判的省察を加えることを通じて、「制作」とは区別される「労働」という行為類型を練り上げてゆく過程を跡付ける。制作対象と制作過程を主体が制御する「制作」に対して、「労働」は、労働過程に人間が動員され、一定の行為を反復させられるという特質をもつのである。第二節では、こうした「労働」概念をもとに、アーレントが新たな仕方で全体主義体制を、とりわけナチス体制におけるユダヤ人絶滅政策のメカニズムを解明したことを、『起源』初版と第二版との記述の相違から明らかにする。第二版によれば、全体主義体制とは一種の無人支配であり、構成員がイデオロギーの無謬の論理に隷属し、その実現に向けて無限に駆り立てられてゆくところに生起する運動体である。それを動かすのは、主体的に暴力をふるうモップではなく、システムに自発的に従属する「大衆」であり、数多の大衆の自発的な従属こそが、絶滅政策の如き行政的大量殺人を可能にしたのである。そのような大衆の典型としてアーレントはナチス将校アイヒマンを見出したのであるが、第三節では、彼女のアイヒマン論における「凡庸な悪」の概念の特質と意義が、先行研究の批判を交えつつ、論じられる。

第五章では、やはり53年の「イデオロギーとテロル」において初めて提示された「出生」概念を考察する。まず第一節において、50年代初頭の『思索日記』を検討し、アーレントがプラトンの「アルケー」概念を批判しつつ、始まりの時間性を、「制作」モデルに特徴的な創造の瞬間としてではなく、世界内で何かが出来てくるという出来事（Ereignis）として捉える視座を確立してゆき、そこからアウグスティヌス哲学を新たに読み解いていったことを明らかにする。アーレントは、52年の「メサイア体験」を経て、アウグスティヌスの「始まり initium」を一人の人間の誕生（出生）として独自に捉え直したのであり、ここに、世界において何かを自発的に始める「活動」の原理が確立されたのである。第二節では、こうした思考様式の転換を、彼女のアウグスティヌス理解の変化を通じて論証すべく、29年の『アウグスティヌスにおける愛の

概念』と、彼女が50年代後半以降に執筆した同書の英訳版草稿とを比較する。後者は、29年の段階では萌芽に留まっていた「世界」概念が、ギリシア的な不滅の天地とキリスト教的な時間的世界という二つの側面から十全に捉え直されていることを示すのである。ここにおいてアーレントは、パウロ的な終末論から最終的に脱却し、世界の内なる人間の生の特質を、時間のなかで他者と出会い、かかわる相互行為（活動）の中に捉えるに至ったのであり、そのことは、『人間の条件』におけるパウロ批判とイエスの赦しの活動をめぐる省察から確かめることができる。第三節では、それぞれギリシア的な愛（エロース）とキリスト教的な愛（アガペー）をめぐる省察であるアーレントのソクラテス論とイエス論を検討し、愛の産物たる子どもの到来（出生）という出来事をアーレントが政治的な活動の原理であると位置づけるゆえんを改めて論じる。

以上の考察を踏まえ、結語において、今後の課題を示す。すなわち、本論文が明らかにした「始まり」の原理を踏まえ、始まりを「引き継ぐ」実践としてアーレントの活動および政治の理論が解明されねばならないのである。

(論文審査の結果の要旨)

1960年代に始まったハンナ・アーレントへの関心の高まりは、半世紀後の今日、政治思想史・政治理論の領域を越えて人文・社会科学の諸領域へと拡大し、ますます多様な解釈を生み出している。一方で、プラトン以来、西洋の知の伝統となった政治と哲学との結びつきを解体すると同時に、他方で、近代の政治に特徴的な政治と経済との連関をも断ち切り、もって政治の独自の意義を強調する彼女の政治思想は、喧しい議論の対象となってきた。政治の特質を哲学的観想^{テオリーア}ではなく実践^{プラクシス}に求める彼女の政治観は、60年代以降に人文・社会科学の分野で大きなうねりとなった実践概念の復権運動の代表となり、また、同一性に回収されない差異を救出しようとする彼女の問題意識は、現代のポストモダニズムの先駆けとして評価されている。しかしながら、汗牛充棟の観のあるアーレント論の多くは、論者の立場に引きつけて彼女の所説の一部分を我田引水的に解釈するものであり、アーレントの学問的、客観的な研究とは言い難いものである。政治思想史研究に徹する本論文の意義は、あくまでもテキストに即して、そして時間軸に沿って彼女の政治思想の形成と変容を跡づけようとする点に求められる。彼女のようなポレミッシュな思想家を研究する論者は、ともすれば問題提起的な偏った解釈に陥りがちであり、それだけに地道な実証的姿勢を堅持しようとする本論文は特筆に価する。著者自身が語るように、こうしたアプローチを採用することによって、特定の解釈に収まらない、常にそれをすり抜ける彼女の思考^{デンク}の運動を救い出すことができるのである。

こうした思想形成史的アプローチが解明した注目すべき論点を幾つか挙げてみよう。第一に、最初の著作である『アウグスティヌスの愛の概念』(1929年)において説かれる隣人の意義への注目が挙げられる。隣人への注目は、単なるアウグスティヌス解釈を越えて、実はアーレントの政治思想の中心的論点である人間の複数性^{イナリテリテ}へとつながる。この処女作は、哲学研究者としてハイデガー及びヤスパースの下で最良のトレーニングを積んだ彼女の純粋な哲学論文として、政治と哲学の異質性を強調する成熟した彼女の政治思想と断絶しているわけではなく、むしろ世界の中で他者(隣人)と共同生活を送るという「人間の条件」を解明した彼女の政治思想を予告する著作なのである。第二に、卓抜なファシズム論である『全体主義の起源』の詳細な分析を通して、初版(1951年)と第二版(1958年)との間にアーレントの立場の変化を見出したことが挙げられる。要するにファシズムとは、能動的ニヒリストである暴徒^{ツプフ}による決定的な行為の瞬間が引き起こしたものではなく、無意味な時間の流れの中で匿名的なシステムに自発的に従属する大衆^{マッセ}の所産なのである。ファシズムの原因について彼女が立場を変えたという著者の指摘は、暴徒の暴力的支配の犠牲者としての大衆という従来^{従来}の解釈を覆しただけ

にとどまらず、他者の住まう世界への人間の^{ナタリデイ}出生を通して不断にシステムの匿名的支配を打破していこうとする主著『人間の条件』（1958年）の中心思想へのつながりを明らかにした点で重要である。しかし、第三に、とりわけ注目すべきは、研究者が等しく指摘するアーレントにおけるギリシア・パラダイムの重要性に対して、ローマ・パラダイムの重要性を論証したことである。前者は、実存主義的な瞬間という時間の亀裂の称揚と政治制度の破壊を志向するのに対して、後者は、有意味な時間の継続性と政治制度の創設と維持という伝統を重視する。前者を強調する多くの解釈が、彼女の政治思想における日常性の軽視と法的空白における決断の賛美を導き出し、そこに肯定と否定の激しい論争が引き起こされてきたのに対して、著者が与する後者は、そうした極端な解釈を退け、彼女の政治哲学が秩序志向的な現実政治にとって有する意義を救出することにつながる。その意味で本論文は、鬼面人を驚かす類の解釈が横行するアーレント研究の現状に対して警鐘を鳴らすものとなっている。

本論文は、労働、仕事、活動という名高い概念が全面的に論じられるアーレントの代表作『人間の条件』のとば口に立ったところで終わっている。彼女に寄り添いながら400頁余りにわたって最初期からのテキストを綿密に分析してきた本論文が、ここで終わっているのはまことに残念なことである。本論文と同様のアプローチによって『人間の条件』以後の思想の発展を解明する作業は、続編に期待したい。しかし、続編を待つまでもなく本論文で示された著者の堅実な方法論と、その結果明らかになった通説との重要な相違は、アーレント解釈における決定的な寄与をなしたと評価しうる。

以上の理由により、本論文は博士（法学）の学位を授与するに相応しいものと認められる。

なお、平成23年12月15日に調査委員3名が論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。